

5.3 生態系の人為的な攪乱状況（外来種と在来種の分布状況）

近年、鑑賞や家畜対象として輸入された種の自然界への逸出などに伴って、本来は日本に生息しない国外の生物種が侵入し、自然界へ広がっている例が数多くみられます。

このような人の活動に伴う生物の移動と再野生化により、生態的に優勢な外来種によって在来の種が排除されたり、置換されたりしています。また、タイワンザルとニホンザルのように自然界では起こらない交雑によって雑種が生まれ、地域で保有されている固有な遺伝子の喪失が懸念されています。

ここでは、人為的な生態系の攪乱状況を明らかにするために、外来種や、それらと生態的に競合する在来種の確認状況について整理しました。

【ミシシippアカミミガメ（外来種）とクサガメ、イシガメ（在来種）の確認状況】

（両生類・爬虫類・哺乳類調査）

- ミシシippアカミミガメは在来のカメ類（クサガメ、イシガメ）の生息するほとんどの河川で確認

北米産のミシシippアカミミガメは、在来のクサガメやイシガメと生息環境が似ていることから競合すると考えられており、在来2種の生息に影響を与えていることが憂慮されています。そこで、これら3種の確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った31河川のうち、ミシシippアカミミガメとクサガメは中国地方を除く東北地方から九州地方にかけて、イシガメは関東地方から九州地方の河川で確認されました。ミシシippアカミミガメのみが確認されている河川は3河川のみで、その他の河川では在来のカメ類とともに確認されました。

（資料掲載: 5-19～5-21、5-32～5-33ページ）

確認河川数の比較（対象河川: 31河川）

種類	前々回調査	前回調査	今回調査
ミシシippアカミミガメ	10河川	16河川	20河川
クサガメ	16河川	15河川	15河川
イシガメ	14河川	11河川	19河川

北米産のミシシippアカミミガメは、1950年代後半から、いわゆる「ミドリガメ」として販売・飼育され、1960年代後半から、野外で野生化した個体が見つかるようになりました。現在では本州、四国、九州のほかに、沖縄島や小笠原父島からも生息が確認されています。河川や池沼、水田などに広く生息することから在来種のクサガメやイシガメと生息環境が競合すると考えられ、ミシシippアカミミガメがこれら在来2種の生息に影響を与えることが憂慮されています。

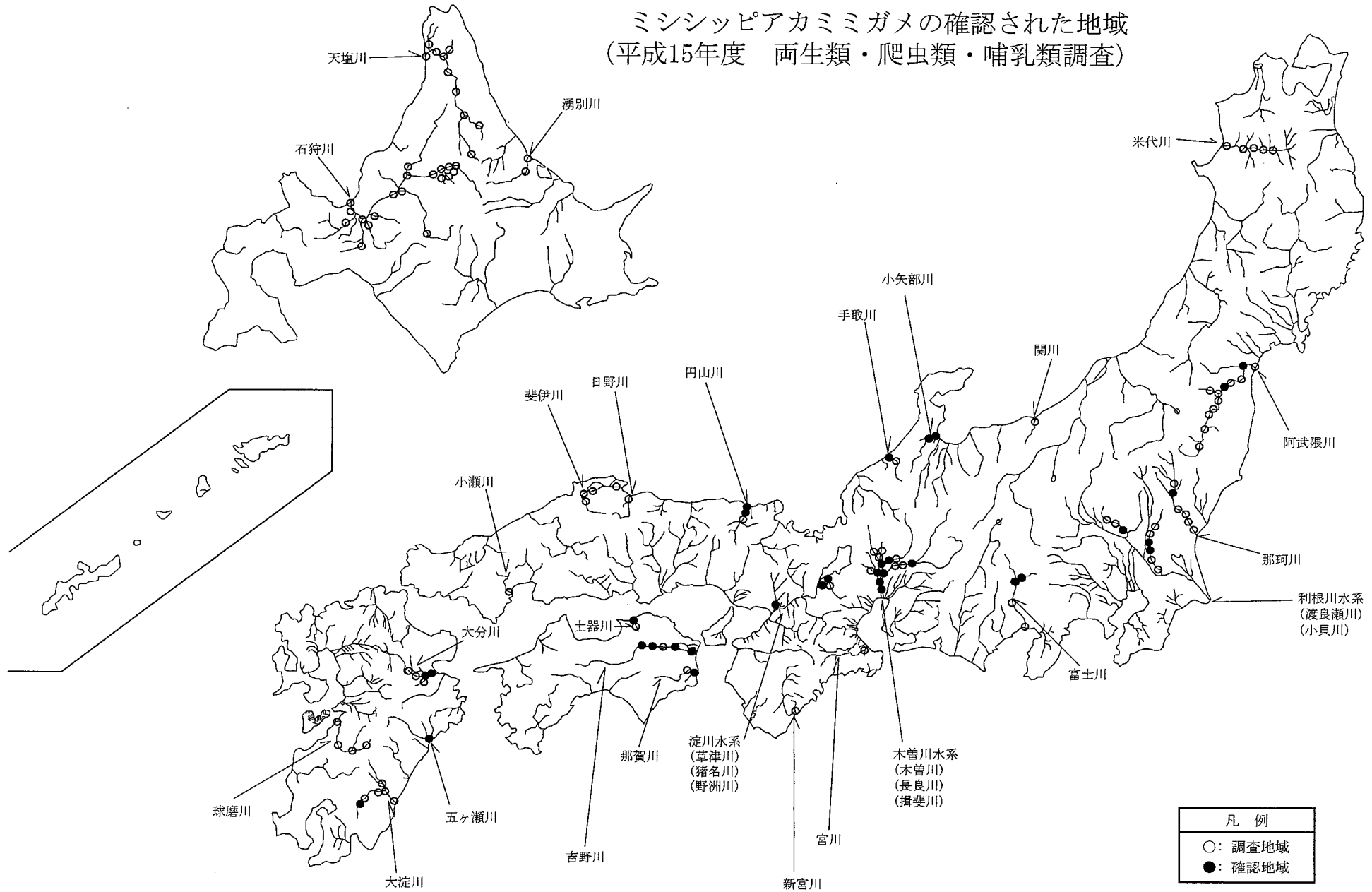
クサガメは、北海道を除く平地の河川、池沼、水田などに、イシガメは、北海道を除く地域に分布し、平地よりも山間部周辺の河川や池沼および水田などに生息しています。

今回の調査結果をみると、ミシシippアカミミガメのみが確認されている河川は3河川のみで、その他の河川では在来のカメ類とともに確認されました。また、この3種のいずれかが確認された調査地区のうち約3分の1ではミシシippアカミミガメとともに確認されています。そして、前々回から今回の調査結果をみると、ミシシippアカミミガメの確認河川数は増加す

る傾向がみられました。

調査結果からはミシシッピアカミミガメによって、在来種が減少している様子はいかがいせんませんでした。しかし、個体数レベルでは何らかの影響がみられる可能性があります。また、生息調査においてカメ類は確認するのが難しく、調査結果は必ずしも生息に関する現況を正確に表現しているとは限りません。そのため、今後もモニタリングを続け、データ数を増やすことも必要と考えられます。

ミシシippアカミミガメの確認された地域
(平成15年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

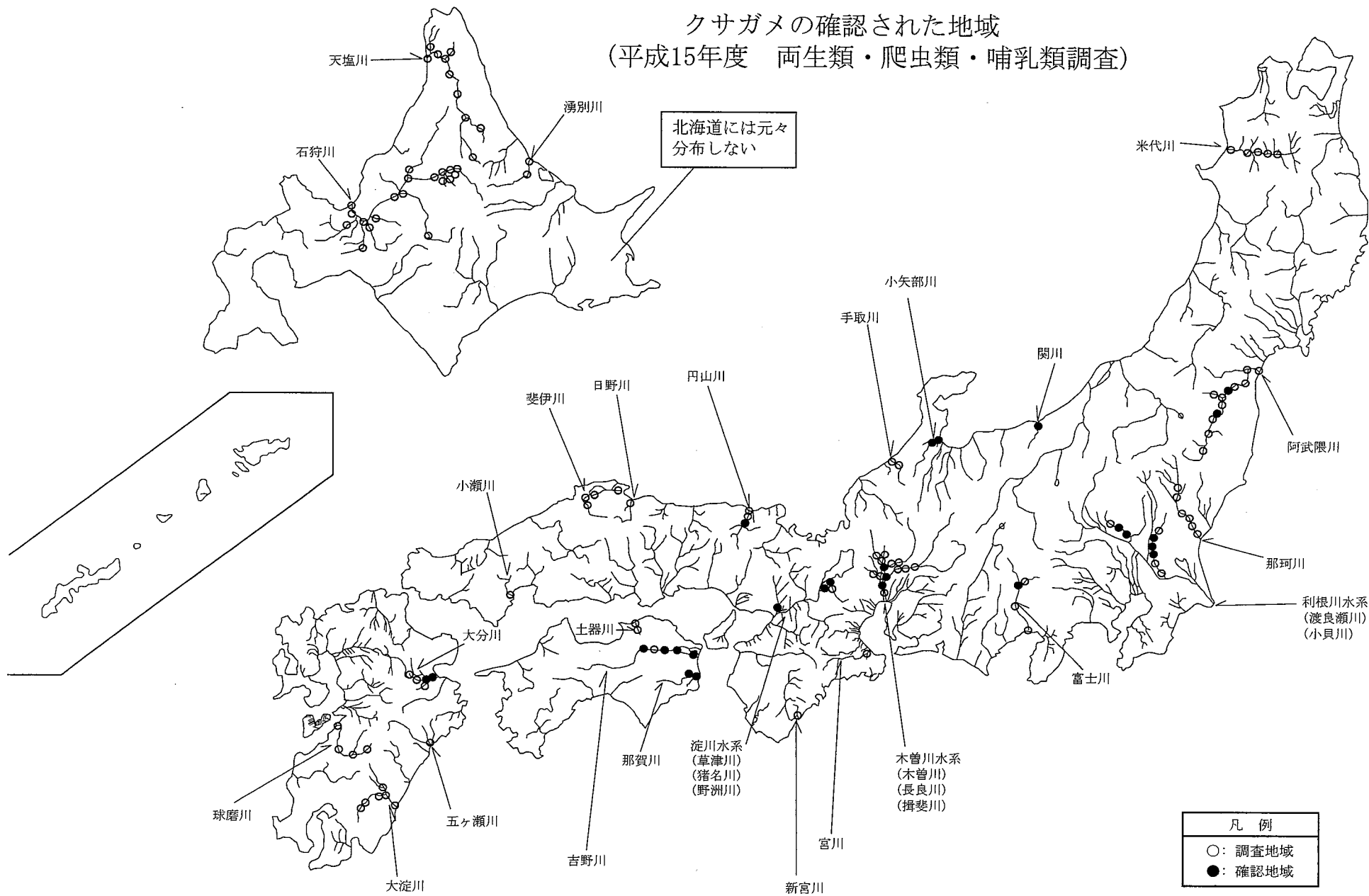


注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

クサガメの確認された地域
(平成15年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

北海道には元々
分布しない

5-20



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

【生産目的で導入された両生類（ウシガエル）の確認状況】 (両生類・爬虫類・哺乳類調査)

- ウシガエルは北海道地方を除く全国で確認
人為的に導入あるいは飼育されていた種の定着状況や、日本における定着状況を明らかにするために、ウシガエルの確認状況を整理しました。
今回とりまとめを行った 31 河川のうち、ウシガエルは北海道地方を除く 23 河川で確認されました。 (資料掲載: 5-23、5-33ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 31 河川)

種類	前々回調査	前回調査	今回調査
ウシガエル	23 河川	20 河川	23 河川

ウシガエルは、1918 年、ニューオーリンズから輸入されたのが最初で、食肉の輸出生産のために養殖されました。戦後の一時期に外貨を得る重要な手段となるように導入されましたが、その後、養殖が廃れ放置されました。前々回から今回の調査ともに確認河川数が多いことから、本種は各地で定着していると考えられます。

【生産目的で導入された哺乳類（ヌートリア、ミンク）の確認状況】

(両生類・爬虫類・哺乳類調査)

- ヌートリアは中国地方で、ミンクは北海道地方で確認
人為的に導入あるいは飼育されていた種の定着状況や、日本における定着状況を明らかにするために、ヌートリア、ミンクを取り上げ、これらの確認状況を整理しました。
今回とりまとめを行った 31 河川のうち、ヌートリアは、九州地方を除く中部地方以西(南)の 7 河川で確認され、そのうち 5 河川では継続して確認されています。ミンクは、北海道地方の 3 河川すべてで確認されました。 (資料掲載: 5-25～5-26、5-33ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 31 河川)

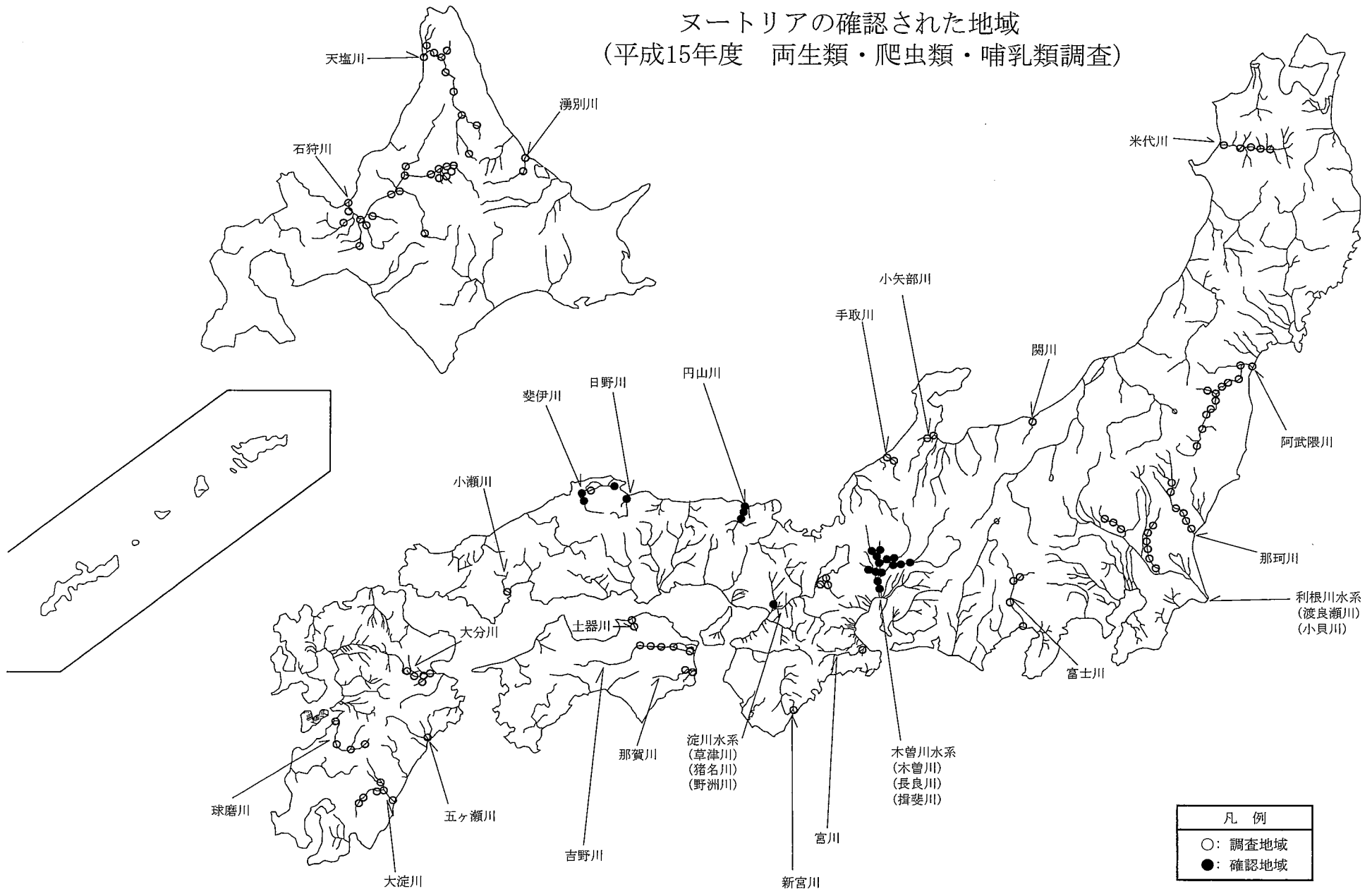
種類	前々回調査	前回調査	今回調査
ヌートリア	5 河川	6 河川	7 河川
ミンク	2 河川	3 河川	3 河川

ヌートリアは、大型のネズミ類で、1939～49年、軍用の毛皮獣として移入され、各地で養殖されました。しかし終戦後、養殖場の閉鎖によって野外に放逐され、野生化しました。南アメリカ原産で、水辺に生活し水草などを食べます。今回の調査結果をみると、ヌートリアは中部地方の 3 河川、中国地方の 2 河川で前々回から今回の調査で継続して確認されたことから、本種が定着している様子がうかがわれます。また、在来の生物群集に何らかの影響を与えている可能性もあり、今後とも引き続き生息状況を把握していく必要があります。

ミンクは、1950年代に毛皮を取る目的で移入され、各地で養殖されるようになりましたが、飼育場の閉鎖などで逃げ出し、北海道で野生化しています。北アメリカ原産で、水辺に生活し、ネズミ類や鳥類を食べ、河川や湖に入って甲殻類や魚類などを食べます。北海道地方の 2 河川では、前々回調査から今回調査にかけて継続して確認されています。

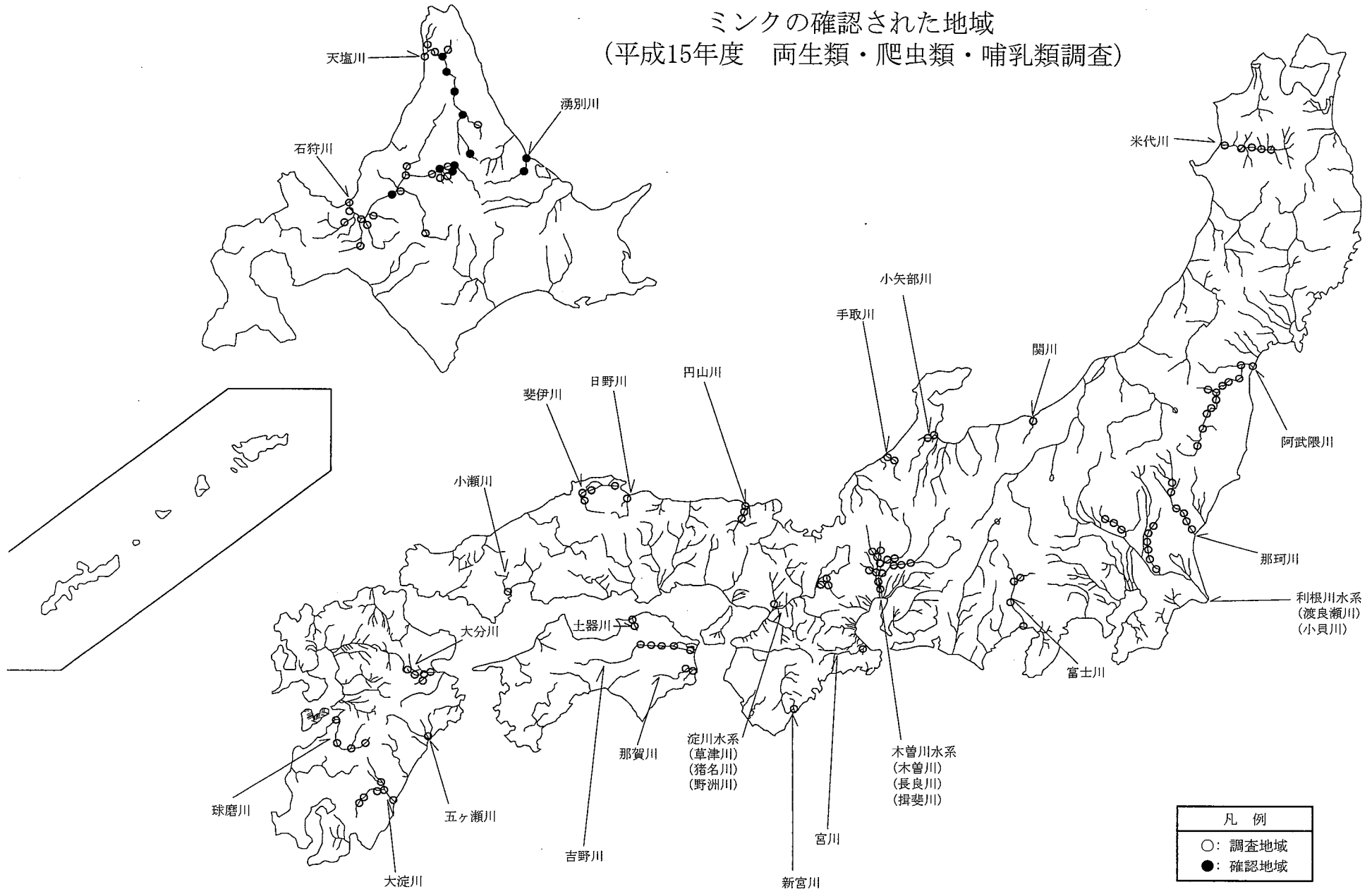
これらの種は、在来の生物群集に何らかの影響を与えている可能性があり、今後とも引き続き生息状況を把握していく必要があります。

ヌートリアの確認された地域
(平成15年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

ミンクの確認された地域
(平成15年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

- アライグマを全国の 5 河川で確認

ペット種と知られている種（アライグマ、タイワンリス）について、これらの種の確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った 31 河川のうち、アライグマは、北海道地方の 2 河川及び中部地方の 3 河川で確認されました。タイワンリスは今回調査では確認されませんでした。

(資料掲載: 5-28、5-33ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 31 河川)

種類	前々回調査	前回調査	今回調査
アライグマ	1 河川	5 河川	5 河川
タイワンリス	0 河川	0 河川	0 河川

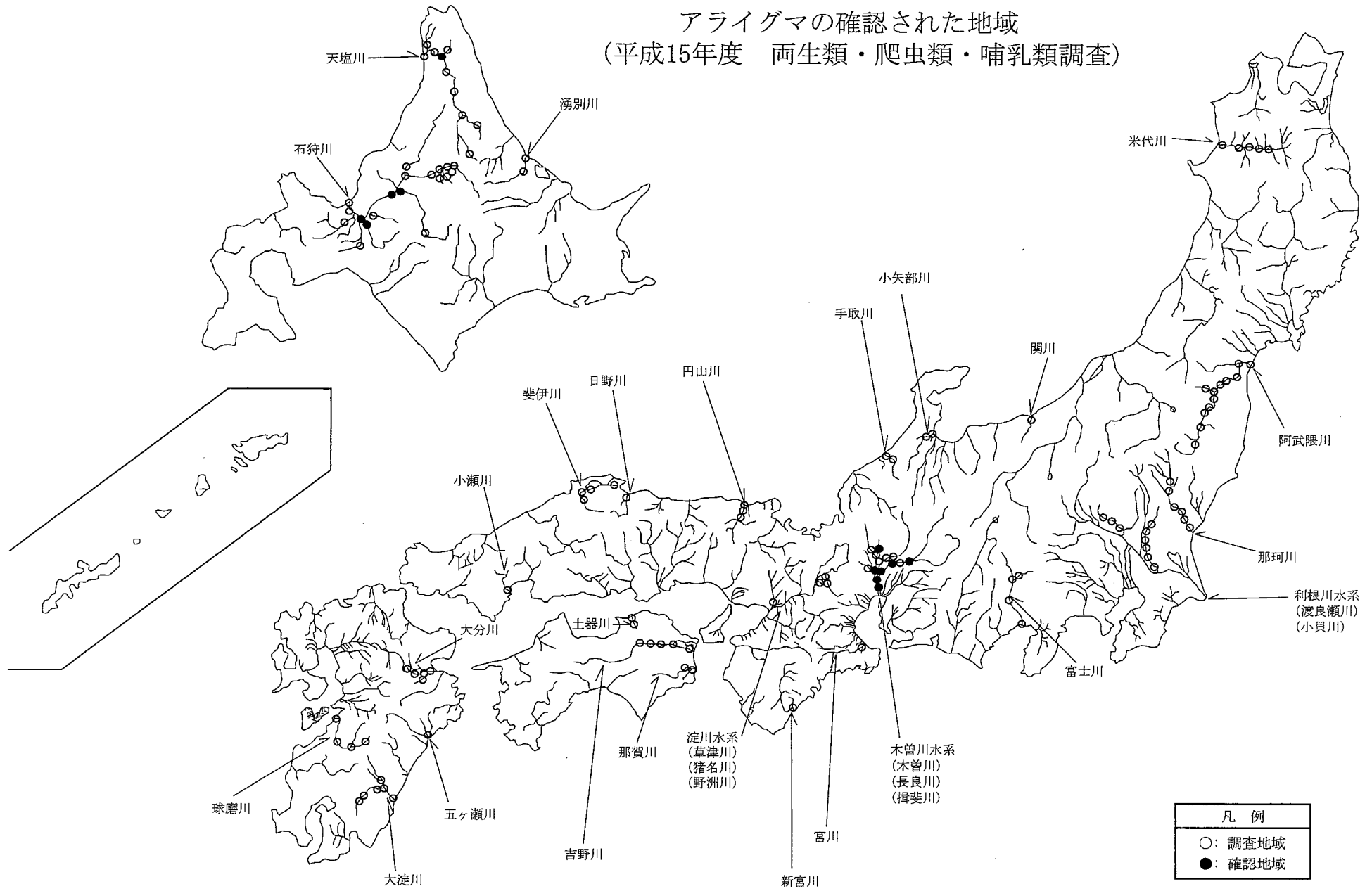
アライグマは、北アメリカ原産でペットとして飼われていた個体が野生化し、農業生産物への被害が報告されている種です。また、本種は雑食性であり、鳥類の卵や雛等を補食することから、在来の生態系への影響も懸念されています。日本で最初の侵入は 1962 年、愛知県の動物園で飼育個体の逃亡によって発生しました。続いて 1979 年には北海道でも飼育個体の逃亡からアライグマが定着し、その後も日本各地で侵入が確認されています。

タイワンリスは台湾原産であり、戦前から各地で飼育されていたようですが正確な記録はなく、1935 年に伊豆大島で飼育個体が逃げたのが最初の記録となっています。その後、観光地や都市公園に導入されました。国内では本州、九州などのいくつかの地域で定着しています。本種が杉皮の剥離などの問題を引き起こしている地域もあります。

今回の調査結果をみると、アライグマは北海道地方の 2 河川及び中部地方の 3 河川で確認されました。また、前々回から今回の調査にかけて、確認河川数の増加がみられました。本種は近年日本各地でその生息が報告され、繁殖も確認されています。

アライグマ、タイワンリスともにこれ以上分布が広がらないように対策等が行われていますが、根絶には至っていません。従って、今後もモニタリングを継続する必要があると考えられます。

アライグマの確認された地域
(平成15年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

- ヌマガエルを関東地方の利根川(渡良瀬川)で確認
人為的な分布の拡大が疑われる種として、ヌマガエルの確認状況を整理しました。
今回とりまとめをおこなった 31 河川のうち、ヌマガエルは、本来の分布域とは異なる
関東地方の利根川(渡良瀬川)で初めて確認されました。 (資料掲載:5-30、5-33ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 31 河川)

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
ヌマガエル	12 河川	13 河川	16 河川

ヌマガエルは、日本では、神奈川県以西の本州、四国、九州、先島諸島を除く南西諸島に分布しています。近年、千葉県の房総半島や栃木県の渡良瀬川流域で生息が確認されています。これらは、人為的な移入によるものと言われていますが、移入の経緯・原因については詳しくわかっていません。

今回とりまとめをおこなった 31 河川では、本来の分布域とは異なる関東地方の利根川(渡良瀬川)で初めて確認されました。確認状況をみると、幼体や成体が確認されています。確認された地区やその周辺では、幼生や幼体の確認も報告されており、今後の分布域の動向についてモニタリングを続け、他の水田のカエル類など在来の小動物相への影響についても留意する必要があります。

